

北海道宗谷地域におけるダークツーリズム： Darktourism in Soya District, Hokkaido.

一 戸 信 哉

はじめに

北海道は、2018年を「明治150年」ではなく「北海道150年」と位置づけて、キャンペーンを行った。¹⁾ このことにあらわれているように、北海道は、日本の近代の歩みとともに、その矛盾を抱えながら進んできた。稚内市を中心とする宗谷地域は、松前藩が交易の場所として宗谷場所を設置したのが1685年、その後19世紀初頭に北方警備のため津軽藩や会津藩から兵士を派遣した時期を経て、以後も国境・海峡をのぞむ地域として発展してきた。1905年には、南樺太が日本の領土となったことで、交通の要衝としての重要性が増し、宗谷本線の開通、樺太連絡船への接続と、地理的な重要な役割を担ってきた。

1945年8月のソ連による南樺太への侵攻で、日本は南樺太を失い、稚内及び宗谷地域は再び「国境」の街となった。南樺太の領有とともに発展してきた稚内及び宗谷地域は、樺太を追われた人々を受け入れる一方、現在ロシアが実効支配しているサハリン州との交流や定期航路の運行に活路を見出そうとするなど、「樺太」を地域の発展に関わる重要な要素として取り込んできた。日露の長年の緊張関係や戦いの歴史、「悲しみの記憶」は、この地域の観光のストーリーにおいても、重要な文脈を形成している。

本稿は2018年8月、2019年9月と数回に渡り、稚内市を中心とする宗谷地域で行った断続的な現地調査に基づいて、「ダークツーリズム」の観点から宗谷地域の観光を分析する。宗谷地域を、北海道宗谷総合振興局管内と捉えた場合、この地域には稚内市のほか9町村が含まれ、「総面積は、4,625.13km²で、全道総面積の約5.5%を占め、ほぼ京都府の面積に匹敵しており、東西148.2km、南北100km」²⁾となる。今回は、主として稚内市と一部猿払村を分析の対象とし、1) 日露関係を中心とした国際関係に関する視点、2) 日本人と樺太に関する視点、3) 樺太アイヌ・宗谷アイヌに関する視点にわけて検討する。

1. 宗谷地域の観光の概況

宗谷地域の中心となる稚内市は、北海道庁が立地する札幌市から300キロ以上、道北の中心地旭川からも250キロ以上離れており、道内の周遊観光のルートには入りにくい場所に位置している。したがって、本州からは羽田空港から稚内空港への直行便を利用するか、新千歳空港で乗り継いで稚内空港に向かうか、いずれにしても空路を利用することが多い。このほか、夏季限定での関西や名古屋からの直行便の運行、地方都市からのチャーター便の運行もあるが、いずれも夏の観光シーズンに限定されるため、通年観光の交通手段にはなりにくい。札幌から鉄道・バスで移動する場合には、約5-6時間の所要時間となる。つまり、域内外との交通手段として、空路を維持する必要性は高いが、利用者数を確保するには観光に頼らざるを得ない。利尻・礼文の2つの島は観光客に人気があり、稚内からフェリーで両島にアクセス可能である一方、新千歳空港や丘珠空港から利尻空港へのフライトも運行されている。

稚内空港を起点とする宗谷観光の団体旅行パッケージは、2泊3日で稚内、利尻・礼文両島をめぐるものが多い。稚内市内の主要ポイントを巡ったあと、利尻・礼文両島をまわって稚内に戻り、最終日稚内空港でのフライトまで、稚内市内を再び観光するというものであろう。多くが観光バスを利用して各地を効率よく巡回するものとなる。

一方、旅行需要の多様化は、この地域でも十分に認識されており、宗谷地域でも個人旅行に対応するさまざまな取り組みが行われつつある。たとえば稚内市内では、わからない観光活性化促進協議会が2016年に設立され、この協議会が、稚内観光ポータルサイト「WOW!50 web」を運営、「思わずやってみたくなる！」稚内でのアクティビティを50項目あげて、日本語、英語、簡体／繁体の中国語で紹介している³⁾。この中では、「稚内公園で、終戦時の樺太（サハリン）からの引き揚げ者たちを偲ぶ」「樺太と稚内の歴史について学んでみる。」といった、ダークツーリズムのアクティビティも紹介されている。観光コースとしても、絶景満喫、歴史探訪、周辺周遊、冬季限定の4つのコースが紹介されている。

また北海道の宗谷総合振興局は、稚内を始めとする各地のフットパスを紹介するほか、「ライダー」「温泉」「歴史文化」といった視点から、宗谷地域を広域でめぐるプランを紹介している。歴史文化の中では各地の郷土資料館や中頓別町の国登録文化財「旧丹波屋旅館」などが挙げられている⁴⁾。

新型コロナウイルスの影響が出る前の2019年度で見ると、宗谷総合振興

局管内の観光入込客数（述べ人数）は、208万5,800人、前年度比14.1%の増加、200万人を突破したのは11年ぶりとされている。訪日外国人の宿泊延べ数は2019年度2万6,617人泊、前年度比0.7%の増加となっている。これらは2019年度最終盤に新型コロナウイルスの影響が出た上での数字であり「コロナ以前」には順調に成果が出ていたと見ることができる。

稚内市が2018年に発表した「稚内市観光振興ビジョン（改訂版）」は、政府が2016年に発表した「明日の日本を支える観光ビジョンー世界が訪れたい日本へー」を受けて、稚内市の方針を改定したものであるが、この中では以下10の「展望」を明らかにしている⁵⁾。

- 展望1. 新たな体制の構築【DMO の設立】
- 展望2. 広域観光の推進
- 展望3. 観光施設の基盤整備
- 展望4. 交通基盤整備の推進
- 展望5. 観光資源の見直し・発掘
- 展望6. 観光情報の発信
- 展望7. 「観光都市わからない」のプロモーション
- 展望8. MICE 等の誘致促進
- 展望9. 外国人観光客の誘致促進
- 展望10. 観光客の満足度向上

このうち本稿との関係では、展望5と展望6の内容が注目される。展望5では、「観光資源の見直し（磨き上げ）」の対象として「自然」「文化」「食」「再生可能エネルギー」「サハリン」の5つのキーワードを挙げている。稚内の場合には、「文化」や「サハリン」の中には、当然ダークツーリズムの要素が含まれると考えられる。また、展望6については、「観光資源の具体的な情報を旅行前・旅行中の観光客に対し、的確に発信する必要」が述べられている。先に挙げた稚内観光ポータルサイト「WOW!50 web」の取り組みはその一環とみることができるだろう。また展望9の「外国人観光客の誘致促進」についても、「WOW!50 web」の多言語対応やYouTubeでの英語コンテンツの配信にその取り組みが見て取れる⁶⁾。

こうした文脈において、稚内を中心とする宗谷地域で、「戦争」「樺太」「国境警備」など、ダークツーリズムに関連する史跡はどのような現状にあるか。以下では、いくつかの視点で分析を試みる。

2. 国際関係と宗谷をめぐるダークツーリズム

稚内市は、「日本最北端」の地と知られ、宗谷本線の終着駅稚内駅は、「日本最北端の駅」とされている。稚内市の観光は、この「最北をたずねる」ことを目的に来る人々に支えられている。日本が領有権を主張する北方領土を含めて考えれば、実際には稚内市が「日本最北端」になるわけではない。だとしても、宗谷海峡は、他国の潜水艦が通過している海域であり、その対岸はロシアが実効支配している以上、「国境」の街としての緊張感があることに変わりはなく、またそれを想起させる施設や歴史的モニュメントも設置されている。

2-1. 大韓航空機撃墜事件の舞台となった稚内の記憶：自衛隊稚内分屯地と祈りの塔

メジャーな観光スポットの一つ、ノシャップ岬は、「岬がアゴのように突き出たところ」を意味するアイヌ語が起源となった地名であり、利尻山に沈む夕日を眺めるべく、夕暮れ時に多くの観光客が訪れる。このノシャップ岬に隣接しているエリアに、自衛隊の稚内分屯地がある。稚内分屯地のレーダーが、1983年9月1日の大韓航空機撃墜事件において、ソ連機の無線通信を傍受したことで知られている。同時に、この場所には1972年まで米軍が駐留しており、米ソがにらみ合う冷戦時代の最前線基地でもあった。

宗谷岬は、日本が実効支配する地域の中では「日本最北端」となる場所（正確には宗谷岬沖合の弁天島）で、その立地上の特徴ゆえに、例年多くの観光客が訪れる。宗谷岬及びその周辺の集落は、宗谷村という独立した村であったが、1955年に稚内と合併している。風も強く自然条件は厳しいが、「最北」に到達した人々で夏場は賑わっており、のどかな雰囲気が漂っているといつてよい。

その宗谷岬公園の中で、ひときわ目を引く「折り鶴」のような形をしたモニュメントは、あたりの雰囲気とは少し異なる背景を背負っている。大韓航空機撃墜事件の犠牲者を慰霊する「祈りの塔」である。東西冷戦時代の事件であり、当時遺族が現地に入ることは難しく、稚内から船で現地に近い海域まで遺族が向かった。毎年9月3日には、稚内市内で大韓航空機撃墜事件の犠牲者を慰霊し、平和を祈念する慰霊祭が行われている⁷⁾。

大韓航空機撃墜事件の発生後、宗谷海域では「遺品」と見られる物品を沿岸で収集したほか、遺族の支援にも尽力したという。米ソ冷戦の環境下、地域住民の力では解決しようもない問題に直面した人々は、ひたすら

「平和」を祈り、「慰霊祭」を続けてきた。参加者の高齢化により、慰霊祭の実施にも困難が生まれているが、祈りの塔の存在が、この事件の記憶を継承している。

「最北」を観光する人々の間で、これらの施設が特に関心を持たれているわけではないのだが、通常の観光ルートの導線上にいずれも位置している。

2-2. 旧日本軍関係の施設と慰霊碑

宗谷海峡に直面するこの地域は、日露戦争の時代から、軍事的に重要性が認識され、軍事施設が設置された。それらが遺構として今日も残るとともに、宗谷海峡での戦闘に関連した慰霊碑も設置されている。

2-2-1. 旧海軍望楼

宗谷岬周辺の丘陵地、宗谷岬と宗谷海峡を見下ろす宗谷岬公園の中で、もっとも海に近いところに設置されているのが、1902年に設置された旧海軍望楼である（写真1）。日本海軍が、宗谷海峡を通過するバルチック艦隊の様子をいち早くつかむために設置した。日露戦争に向けて設置されたこの施設は現在も維持されており、20世紀初頭の日本にとって、宗谷海峡が地理的にどのような意味を持っていたのかをうかがい知ることのできる施設となっている。



写真1: 旧海軍望楼 (筆者撮影)

2-2-2. 旧陸軍砲台指揮所

宗谷岬の背後にある丘陵地、宗谷丘陵には、宗谷岬牧場の広大な牧草場が広がっているが、この丘陵の中に、旧陸軍砲台指揮所が残されている（写真2）。こちらには海軍望楼のような案内はなく、地理的にも観光客が訪問するエリアからは少し距離があるばかりか、熊笹に覆われて近づくのも容易ではない。樺太南端の西能登呂岬の砲台とともに建設さ



写真2: 旧陸軍砲台指揮所 (筆者撮影)

れ、完成は1941年とされており、太平洋戦争の際に宗谷海峡での戦いにおいて使用された施設と考えられる⁸⁾。

2-2-3. 旧大湊海軍通信隊稚内派遣隊幕別送信所（通称 稚内赤れんが通信所）

宗谷岬よりも稚内市街地よりの恵北という集落に、海軍が無線通信基地として用いていた赤レンガの施設が残されている（写真3）。この施設では、真珠湾攻撃の指示を伝える暗号電文「ニイタカヤマノボレ一〇八」の中継打電が行われたとされる。現在は稚内市が国から取得



写真3：旧大湊海軍通信隊稚内派遣隊幕別送信所（筆者撮影）

し、市民団体「稚内市歴史・まち研究会」が保存・管理にあたっている。稚内市が取得した当初は、老朽化による傷みが激しかった建物だが、クラウドファンディングや財団法人からの助成金を活用して、修復が進められ、近年は時期を定めた一般公開なども積極的に行われている^{9) 10)}。

2-2-4. 浅茅野飛行場跡

猿払村浅茅野（あさじの）地区には、かつて対ソ防衛を目的として陸軍が飛行場を建設していた。現在はその痕跡を探すのは困難で、特に案内板はない。1944年までに第一と第二、2つの飛行場が建設されたが、それらが使用されることはなかった。建設にあたっては、朝鮮半島から多数の労働者が強制連行され、劣悪な労働環境で亡くなった者も多かったという。2006年には、日韓の団体等による、旧共同墓地の発掘作業も行われている¹¹⁾。

飛行場の構造物を探し当てたという写真も、ウェブ上には散見されるが、2018年8月に筆者が現地に行った際には、「飛行場前」というバス停を見つけれただけであった。1989年に廃線となったJR天北線には、飛行場前駅（国鉄時代は飛行場前仮乗降場）があり、駅の跡も依然残っているようだが、特に案内板は残されていないようで見つけることはできなかった。天北線跡の铁路の一部は、サイクリングロードとして利用されていたが、熊が多く出現したために現在は封鎖されている。

2-2-5. 宗谷海域海軍戦没者慰霊碑

旧海軍望楼の近くに設置されているこの慰霊碑は、宗谷海域で犠牲となった戦没者の慰霊碑である。特に1945年7月に連絡船の宗谷丸の身代わりとなった第112号海防艦の乗組員を慰霊する意味合いが強く、これについて詳しく紹介されている。当時、宗谷海峡を航行する稚泊航路連絡船は、米軍の潜水艦の標的となり、宗谷丸も魚雷攻撃を受けたが、第112号海防艦が身代わりになったという。この慰霊碑は、宗谷防備隊出身者の寄付により¹²⁾、1980年に建てられている。

2-2-6. 平和の碑

宗谷海峡での戦闘で犠牲になった、日米両国の犠牲者を慰霊するために、1995年に旧海軍望楼の近くに設置された。1943年10月、日本海軍によって撃沈された米潜水艦ワフー号と、そのワフー号によって撃沈された日本の民間船舶の犠牲者を慰霊するものである。

旧軍関係の施設のうち、「観光資源」として認知され、維持管理が行われてきたと考えられるのは、旧海軍望楼だけだと言ってよい。幕別送信所（通称 稚内赤れんが通信所）への関心は近年高まりつつあるものの、太平洋戦争の記憶の風化、寒冷地ゆえの施設の老朽化を食い止めることができるかどうか、地域の取組が続けられている。

旧海軍望楼のある場所は、海峡を監視するという本来の役割からすると当然であるが、宗谷海峡を見渡す位置にあり、宗谷岬を訪れた人々が立ち寄りやすい立地となっている。その周辺に宗谷海域海軍戦没者慰霊碑や平和の碑を設置したことにより、宗谷海峡での戦争の記憶を思い出させる仕掛けが、かろうじて維持されているといえる。

2-3. 江戸時代の国境警備の痕跡を残す宗谷公園

宗谷地域が国際関係の緊張に引き込まれ、「国境」を意識するようになったのはじまりは、18世紀末から19世紀初頭にまで遡る。南下政策をとるロシアの脅威を認識し、幕府が蝦夷地の調査等北方警備の動きを進めていく中、稚内周辺では、1805年にロシア使節レザノフがノシャップ岬に上陸し、これに対応する形で、以後宗谷を幕府直轄として警備が行われた。とはいえ、この地域の冬の厳しさは十分認識されていなかったため、当初津軽藩、会津藩の藩士が北方警備を命じられて、水腫病にかかって犠牲となっている。

旧宗谷村の中心部にある宗谷公園には、「津軽藩兵詰合の記念碑」等が設置されている。この記念碑は、1992年に青森県弘前市の有志によって設置されたもので、コーヒー豆をかたどった石碑である。当初北方警備を命じられた津軽藩士らは水腫病で多く犠牲になっているが、のちに水腫病を予防するために、コーヒー豆が配給された。この点にちなんで設置されたものであるという¹³⁾。

北方警備にあたり、この地で亡くなった人々の墓は各地に点在していたが、のちに宗谷公園に集められ、慰霊祭も行われている。また、公園に隣接する場所には、「津軽・会津・秋田藩陣屋跡」という看板が設置されている。

宗谷公園は、宗谷岬に向かう国道からわずかに集落内に入ったところがあり、観光ガイドに「津軽藩兵詰合の記念碑」が記載されていることはあるが、この地を訪れる人が多いようには思われない。江戸時代後期の国境警備というのは、樺太への探検と同じ文脈のもとにあると考えられるが、注目はされにくい。稚内市内中心部から宗谷岬までは30キロあり、この間にあるスポットを公共交通機関で回るのは現実的ではなく、自家用車・レンタカーなどを利用することになる。見方を変えれば、ICTの活用により、宗谷公園のような知名度の低いスポットの価値が、再度見直される可能性があるともいえる。稚内観光ポータルサイト「WOW!50 web」の50のアクティビティの中には、「宗谷公園で稚内発祥の頃の歴史を知る。」という項目が含まれている¹⁴⁾。ここもまた最北観光の導線上にはあるため、少なくとも個人観光の人々が訪れるダークツーリズムスポットとして、整備していく可能性はある。

3. 日本人と樺太に関するダークツーリズム

樺太をめぐる国境は、戦争を含めて国際関係の変化とともに幾度も変化してきた。宗谷海峡を挟んで樺太の対岸にある北海道宗谷地域には、その痕跡が多く残されている。日露戦争以後、日本が領有した南樺太は、太平洋戦争終戦時人口40万の規模まで発展していた。ソ連の対日参戦により、樺太では多くの日本人が犠牲となり、生き残った人々も苦難の末に本土に引き上げることとなった。こうした引揚者の思いを託された場所が、稚内を含む宗谷地域ということになる。

3-1. 稚内公園

稚内公園は、昭和36年に供用開始された公園で、市街地をのぞむ高台に

位置している。氷雪の門、開基百年記念塔などのモニュメントが設置されており、市内ツアーコースにも必ず含まれる場所である。高台にあるがゆえに、宗谷海峡も一望でき、「国境」「樺太」に関連する施設が多く設置されている。この高台には住宅はなく、冬は除雪もされないため、公園自体が閉鎖される。失われた島である樺太を望むことができるという立地条件ゆえに、ダークツーリズムの文脈が付与された場所である。

3-1-1. 氷雪の門

氷雪の門は、樺太への望郷の念とそこでなくなった人々を慰霊するために、昭和38年に稚内公園に設置された（写真4）。正式名称は「樺太島民慰霊碑」。高さ2.4m、雪と氷の樺太を生き抜いて、敗戦の失意から立ち上がる人々を象徴する女性像とされる。



写真4：氷雪の門（筆者撮影）

彫刻家本郷新が制作している。この場所から、快晴の日には樺太を望むことができるという。

3-1-2. 九人の乙女の碑

樺太の真岡郵便局（現ロシアサハリン州ホルムスク）で、電話交換業務にあっていた女性たちの慰霊碑である。氷雪の門の隣に設置されている（写真5）。



写真5：九人の乙女の碑（筆者撮影）

昭和20年8月20日、樺太西海岸の街、真岡には、ソ連軍が上陸、最後まで電話交換業務のために現地に残った女性たちが、「皆さん、これが最後です。さようなら、さようなら」の言葉ののち、青酸カリで自害したとされている。9人の女性たちの名前とともに、最後の言葉が、石碑に刻まれている¹⁵⁾。自動交換機がなかった時代、電話交換手は情報インフラを支える重要な存在であり、女性たちは危険を覚悟の上で職に殉じた。情報通信に従事する人々の社会的責任を想起させる事件であるため、この石碑周辺の花壇整備などを、NTT関係企業が行っており、企業名が表示されている。また、毎年8月20日に稚

内市で開催されている、「氷雪の門・九人の乙女の碑平和祈念祭」においても、NTT関係者が実行委員に名を連ねている。

この電話交換手の悲劇を、映画化したのが、1974年に製作された映画「樺太1945年夏 氷雪の門」である。映画の全国上映により、この出来事が広く国内で知られることになるかに思われたが、公開直前にソ連からの圧力により公開が中止になっている。その後、2010年に、あらためて公開されている。

3-1-3. 望郷の樺太の碑

稚内公園内の樺太関連の石碑のうち、もっとも新しく設置されたものが、2019年7月に設置された「望郷の樺太の碑」である(写真6)。樺太引揚者らが作った団体、全国樺太連盟が、樺太各地に建立された慰霊碑のリストを刻み込んだ石碑として設置した。樺太連盟は、この石碑を建立したのち、会員の高齢化を理由として、2021年3月に解散している¹⁶⁾。会員の高齢化は、会の運営と維持だけでなく、各地に設けられた慰霊碑の維持管理にも難しい状況をもたらしている。



写真6：望郷の樺太の碑(筆者撮影)

3-1-4. 教学之碑

樺太庁師範学校で学んだ同窓生が、すでになくなってしまった母校を思い、平成元年(1989年)に建てたものである(写真7)¹⁷⁾。「至誠一貫」を本義として、「樺太開拓に貢献する教育者としての資質の琢磨錬成に努め」と記述されている。自らの教員としての資質を養った母校への思いをこの記念碑に込めたということが、よく読むと理解できる。しかし、戦後70年以上が過ぎ、教学之碑の建立からも30年以上が経過しており、稚内公園を訪れる人の中で、この碑に足を止める人は多くはないであろう。



写真7：教学之碑(筆者撮影)

3-2. 猿払電話中継所跡

樺太・真岡郵便局での電話交換手の集団自決については、稚内公園の「九人の乙女の碑」がよく知られているが、猿払にも樺太との通信に関連する史跡が残されている。浜猿払漁港の近くにある、「猿払電話中継所跡」という石碑である（写真8）。この場所には、1934年に北海道と樺太をつなぐ海底ケーブルを陸揚げした中継所、猿払電話中継所があった。敷地内には、海底ケーブルも展示されている。

「九人の乙女」についてや、敷設されたケーブルのルートを図解した案内板には、猿払ライオンズクラブの名前があり、地域の人々が維持管理を行っている様子が見られるが、猿払村の観光情報の中には、この石碑のことは記されていない。



写真8：猿払電話中継所跡（筆者撮影）

3-3. 間宮林蔵立像と渡樺出港の地の碑

幕府が北方警備のため、東北の藩からこの地に兵を送り込んでいた頃、宗谷海峡を渡り、樺太の調査を行ったのが、松田伝十郎や間宮林蔵である。樺太が島であることを発見した間宮の名前が「間宮海峡」として残っているのはよく知られているところであろう。稚内市内でも、間宮林蔵が「宗谷」を拠点に樺太に渡ったことは、「観光資源」としても重視されており、2009年には間宮海峡発見200周年を記念して、「りんぞうくん」というキャラクターを作成している¹⁸⁾。

稚内市内の間宮林蔵関連施設としては、宗谷岬に1980年に設置された間宮林蔵の立像がもっとも知られている。宗谷海峡を望んでいる2mのブロンズ立像で、危険な探検に旅立つ間宮の強い決意を示すような趣となっている。

松田と間宮が実際に出発した場所と考えられているのが、宗谷岬よりも3キロ西にある現在の第2清浜地区である。この場所には、「間宮林蔵渡樺出港の地」という石碑が設置されている（写真9）。「最北端」



写真9：渡樺出港の地の碑（筆者撮影）

観光の中心地である宗谷岬に比べると、「渡樺出港の地」の地には十分な駐車スペースはなく、この場所を訪れる人は少ない。

3-4. 稚内の鉄道駅とフェリーターミナル

稚内駅は宗谷本線の終着駅であり、日本最北の駅でもある。この鉄道の建設が進められた背景には、日本が領有した南樺太への輸送路の確保という狙いがあった。そのことは鉄道駅やフェリーターミナルなどの港湾施設、その周辺の構造物や記念碑にあらわれている。



写真10：稚内駅（筆者撮影）

現在、稚内駅には、「最北端の線路」という看板や「日本最北端の駅」の標柱が建てられており、看板には「最南端から北へ繋がる線路はここが終点です。」と書かれている（写真10）。「最北」を目指してきた観光客にとっては、達成感を感じることができる場所の一つである。

宗谷本線は、樺太への連絡鉄道として位置づけられて建設が進められてきた路線であった。最初の稚内駅（現在の南稚内駅）が開業したのが1922年、翌年の1923年に稚内から樺太大泊（現在のコルサコフ）への鉄道連絡船、稚泊航路が就航している。さらに1926年には、音威子府から幌延を経由して稚内にいたるルートが開通し、1928年に稚内港駅（現在の稚内駅）も開業、現在の宗谷本線のルートが完成する。北海道を鉄道で北上し樺太に向かうための「大動脈」として、宗谷本線が急ピッチで建設されていたことがうかがえる。

ソ連の対日参戦により、樺太はソ連の実効支配となり、樺太の連絡航路は事実上消滅、北海道と樺太をつなぐ宗谷本線の役割は失われた。その後も宗谷本線自体は、この地域を札幌などの大都市とつなぐ役割を担うことにはなるのだが、樺太と本土をつなぐための大動脈という存在意義が失われる中、沿線地域の人口減少の影響も受けることになっている。1989年、JRの分割民営化の際に、当初宗谷本線のルートであった音威子府から浜頓別を経由して稚内に至る路線、天北線は全線廃止されている。

2016年、JR北海道が厳しい経営状況を理由に「自社単独で維持することが困難な路線」を発表した。その中に宗谷本線も含まれ、宗谷線の存続そ

のものが議論の対象となっている。2021年3月には、宗谷線沿線の12駅が廃止となった¹⁹⁾。宗谷管内では、幌延町の安牛駅、上幌延駅、豊富町の徳光駅がそれぞれ廃止されている。

稚内駅とその近郊のフェリーターミナルは、日本とロシア（ソ連）との緊張関係、樺太への対外進出といった歴史を背負った場所であり、その後樺太に暮らした人々の悲劇の記憶が残る場所でもある。

稚内駅は、2012年に駅舎を全面的に建て替え、「道の駅わっかない」としての機能も備えている。この稚内駅（当初は稚内港駅）から、樺太連絡船の乗り場まで400メートル、当初乗客はここを歩いて移動していたが、1938年に稚内棧橋駅が設置され、乗り場まで鉄道が乗り入れる形になった。この乗り場において、乗客を高波から守るために設置されたのが、北防波堤ドームである。

3-5. 北防波堤ドームと稚泊航路記念碑

北防波堤ドームは、稚内港に設置されている高さ13.6m、総延長427m、半アーチ型の構造の建築物である。稚内港に押し寄せる高波から、道路、鉄道、さらには船に乗り換える乗客を守ったと言われているが、現在は、特徴的な構造から、観光名所ともなっている。この構造物は、1931年に稚内築港事務所に赴任してきた北海道庁の技師、土屋実が設計し、5年の歳月をかけて建設された。

昭和20年8月以降、樺太から緊急疎開等で引き揚げた人々の多くが、稚内に降り立った。親族等を頼って小樽などさらに南に向かった人々もいる一方、稚内で再起をはかる人も多く、こうした人々を受け入れたのも北防波堤ドームであり、稚内であったことになる。当時「町」であった稚内は、このとき多くの引揚者を受け入れて、人口が急増した結果、1949年に市制施行、稚内市となった。このとき北海道に引き揚げた人々やその子孫が現在も稚内に多く暮らしている一方、それ以外の当時を知る稚内市民にとっても、樺太からの引き揚げというのが、「街の記憶」として大きな意味を持っていることがうかがえる。なお、北防波堤ドームは、NPO法人北海道遺産協議会によって運営されている、「北海道遺産」に指定されている²⁰⁾。

北防波堤ドームと土屋実に関しては、稚内市が「北防波堤ドーム物語」というコンテンツをウェブページに設けており、このページの中で、石川寿彦「北防波堤ドーム物語～北防波堤ドームを造った男～」というマンガ作品を、PDFで公開している²¹⁾。

北防波堤ドームのほど近くに、1970年、稚泊航路記念碑が設置されてい

る。碑文には、当時の旭川鉄道管理局長及び稚内市長の名前が刻まれている。稚内からの連絡船は、稚内と大泊を結ぶ稚泊航路のほか、稚内と樺太西海岸の本斗（現在のネベリスク）を結んでいた稚斗航路があった。稚泊航路が鉄道省管轄の航路であったのに対して、稚斗航路は、北日本汽船による運行であった。樺太への航路を記念するモニュメントであるが、この記念碑では稚泊航路だけが文言にも現れている。

3-6. 大鵬幸喜上陸の地記念碑

北防波堤ドームの近くに、2020年新たに建てられたのが、かつての横綱大鵬に関する記念碑である。大鵬の等身大の姿が描かれている。石碑の裏側には「ここ稚内で降りたことで今の自分がある。横綱になれたのも稚内が原点」との文字が刻まれている。大鵬は、樺太の敷香で生まれ、5歳のときに緊急疎開のため小笠原丸で引き揚げた。当初は小樽まで行く予定であったが、予定を変更して稚内で降りることになった。その後小笠原丸は、留萌沖でソ連の潜水艦による攻撃を受けて沈没している（三船遭難事件）²²⁾。

三船遭難事件は、宗谷地域より南の留萌管内の事件であるが、留萌郡小平町には、「三船遭難慰霊之碑」が建てられ、小平町郷土資料館には小笠原丸とともに攻撃を受けた泰東丸の遺品が展示されている。このほか、留萌市、増毛町にも慰霊碑が建てられており、留萌市内では慰霊祭も行われている。宗谷地域とこの事件の関連性は薄かったが、大鵬の記念碑により、三船遭難事件を想起させる仕組みは確立された。北海道の西海岸沿いは、小樽から稚内まで北上する「日本海オロロンライン」という観光ドライブルートとして人気がある。樺太からの引き揚げで、終戦後に民間船が犠牲になっていたことについて、道北観光の導線上で学び、「戦争を終わらせる難しさ」を追体験させる施設といえるであろう。

3-7. 稚内市樺太記念館

宗谷地域の観光を考える上で、「樺太」という、地域の外側の要因を外して考えることは難しい。地理的な特性に正面から向き合って、資料の収集、展示、調査研究の機能を備えた施設として整備されたのが、稚内市樺太記念館である。先に述べたとおり、樺太に関する資料の展示という意味では、稚内公園の北方記念館との重複はあるのだが、樺太記念館は通年で開館しているという点に大きな違いがある。稚内市は、2017年に一般社団法人全国樺太連盟より資料の寄贈を受けたのを契機に、2018年5月に樺太

記念館をオープンさせており、樺太連盟解散後、樺太関連の資料を収集・展示する拠点としての機能が、北方記念館とともに期待されている。

解散した樺太連盟の資料は、稚内市だけでなく、北海道博物館にも寄贈されている。札幌市中央区の北海道庁赤れんが庁舎には、樺太関係資料館が開設されていたが、赤レンガ庁舎のリニューアル工事に伴って閉館となっている。リニューアル後も樺太関連の資料展示が行われると発表されているが、その規模は明らかではない²³⁾。

樺太記念館の特徴的な取り組みとして、地元大学との連携により、樺太に関わる映像作品の制作と上映を行っている点を挙げておきたい。地元稚内北星学園大学の学生が制作に関わった作品が所蔵されており、横綱大鵬と稚内との関わりを描いた「ここで降りたがために、今がある。～昭和の大横綱大鵬の物語～」など樺太関連の作品が上映されている。本稿は、ダークツーリズムの観点から、樺太と稚内との深いつながりがあることを前提にしているが、現状、両国の市民が気軽に往来する関係が確立されているとはいいがたい。地元の大学生が、取材を通じて樺太・サハリンと稚内のつながりを知ることは、海峡を超えた関係構築において、重要な意義を持つ取り組みといえる²⁴⁾。

以上見たとおり、宗谷地域の歴史の中で、樺太の要素は切っても切り離せないものとなっており、稚内を含む宗谷地域の発展は樺太の発展とともに成し遂げられ、樺太が失われてもなお、その文脈を引き継ぐ形となっている。

4. 宗谷アイヌと樺太アイヌをめぐるダークツーリズム

ここまで見てきた宗谷と樺太のつながりやその歴史は、内地にルーツを持つ「和人」の視点から捉えたものである。これに対して、北海道や樺太で暮らしていた先住民族の視点から見れば、これらは「和人」による侵略の歴史とも言えるだろう。

2020年7月にウポポイ（民族共生象徴空間）が開業して以降、北方先住民族への関心が国内でも高まりつつある。この施設が設置されたのは、北海道胆振地方の白老町であるが、宗谷地域から400kmほど離れており、同じ北海道内とはいうものの、地理的一体性は乏しい。アイヌを始めとする先住民族の歴史への関心は、宗谷地方ではまださほど高まってはいない。ただ先住民族であるアイヌが、宗谷地域で暮らしてきた足跡を、たどることは不可能ではない。地域社会の関心が高いとはいえ、観光の動線の中にも組み込まれてはいないのだが、いくつか可能性を探ってみたい。

4-1. 「メグマ」と樺太アイヌ

稚内空港の周辺の海岸線に、ミズナラが群生している地域がある。現在の住所でいうと、声間、増幌といった海岸線上の集落がこれにあたる。この地域に、アイヌ語に語源を持つ地名、メグマあるいはメグマ海岸がある。『稚内百年史』によると、このメグマ海岸には、一時期樺太アイヌの人々が暮らしていたという²⁵⁾。1875年の樺太千島交換条約によって、「日本居住を求めるカラフトアイヌ八百四十一人が北海道に移住」し、「メグマの浜」に移住したという²⁶⁾。このとき、この場所を選定したのが、庄内藩出身の大判官松本十郎で、松本は漁民である樺太アイヌが、漁業を継続できるという点、対岸に樺太を望めるという点を考慮し、この地を居住地に選定したとされる。しかし開拓使の黒田清隆がこの決定を覆し、石狩国の対雁に強制移住させている。のちに対雁では、コレラや天然痘が流行して、多くの人々が命を落としている²⁷⁾。松本十郎は、この決定に激怒して辞職、以後は官職にはつかずに山形県の庄内で過ごしたとされる²⁸⁾。筆者の現地調査段階では、この地域に、樺太アイヌの居住地域だったことを示す案内板などは確認できなかった。

樺太アイヌが宗谷から移住させられた対雁は、現在の江別市にある。市営墓地には、樺太アイヌの慰霊碑が建てられており、こうした歴史に関心を持つ人々の間によく知られている。ただしこちらも、市営墓地の一角に特に説明もなく設置されている。2019年8月、筆者もこの場所に立ち寄ったが、墓地内を少し探し歩くことになった。なぜ「樺太」から移住した人々がここで弔われているのか、事情を知らない人が関心を持つような説明などがあれば、より理解が深まると考えられる。

4-2. 戦後の「引き揚げ」地域

樺太アイヌは、ポーツマス条約で南樺太が日本領となったあと、多くが樺太に戻ったが、1945年に再度北海道に引き揚げた。その後樺太アイヌが集落を形成したのが、宗谷管内豊富町の稚咲内である。稚内から西海岸を道道106号線で移動するドライブコースに、稚咲内海岸があるが、ここに隣接する集落である²⁹⁾。稚咲内集落には、沿岸バスのサロベツ線が運行されていたが、2021年3月に廃止され、タクシーによる代行運送が始まっている³⁰⁾。いずれにしても、公共交通でのアクセスが困難な地域である。

4-3. 稚内市開基百年記念塔・北方博物館

強制移住により一時期宗谷地域に住んでいた樺太アイヌとは別に、もと

もと宗谷村地域に住んでいたアイヌ、宗谷アイヌと呼ばれる人々の存在も指摘しておきたい。ただし、アイヌ協会の地域支部があるのは、宗谷地域内では豊富だけであり、宗谷村地域でまとまって暮らしていたとされる人々の痕跡を見出すのは現在困難になっている。わずかにその資料を展示しているのが、稚内公園の開基百年記念塔内の北方博物館ということになる。

稚内公園をさらに上に登ったところに、高さ80メートルの塔が建てられている。これが稚内市開基百年記念塔である。稚内において、「開基」は、宗谷に戸長役場が置かれた明治12年（1879年）であるとされており、それから100年を記念して、1978年に百年記念塔が建てられている³¹⁾。高さ80メートルの塔は展望台となっており、サロベツ原野、オホーツク海、利尻島、礼文島、さらには日によっては樺太／サハリンまで望むことができる。

この展望台に向かうエレベータがある1階と2階には、地域の資料を展示する北方記念館が置かれている。2階では樺太関係の常設展示が充実している。日本時代の樺太の産業、都市、航路、鉄道などの展示があり、ループ線で知られた豊真線（豊原－真岡間）については、模型を用いて詳しく説明されている。

1階は、間宮林蔵と松田伝十郎による樺太探検に関する展示、北方警備にきた江戸時代の人々が就寝時に使った「寝棺」、江戸幕府や松前藩とアイヌとの交易の歴史に関する展示、市内の市街地等の古写真とならんで、宗谷アイヌの文化伝承者であった柏木ベンさん（1879年-1963年）に関する展示がある。

おわりに

「帝国の北門」とされた北海道は、対ロシアの防衛拠点であり、宗谷地域は19世紀初頭からその最前線となった。その過程で宗谷が戦火に巻き込まれることはなかったが、軍事的な緊張をつねに強いられる場所であり、1945年の終戦時には、宗谷海峡を挟んだ対岸の樺太での悲劇を、地域として受け止める側に回ることになった。本稿ですで見たとおり、現在の「最北端」をめぐる宗谷観光の中にもこうした歴史を背負った「ダークツーリズム」の要素が多く含まれていた。注目すべきは、これらが従来からある宗谷・稚内観光の導線上にかなり含まれているということである。

地域の公共交通については、天北線の廃止から30年以上が経過し、宗谷本線の維持にも困難がある中で、厳しい状況が続いている。個人がさまざま

まな関心から、この地域の背負う歴史・文化、あるいは「悲しみの歴史」をたどろうとするときに、公共交通の弱さはハンデとならざるをえないが、広い地域をレンタカーなどで自力で移動する人々に対して、ICTを利用して多様な情報を提供をすることは可能であろう。

最後に、本稿でも十分に扱うことができなかった視点の一つに、この地域のアイヌの歴史の記録と継承をあげておきたい。稚内市北方記念館には、宗谷アイヌの文化伝承者である柏木ベンさんの展示、樺太アイヌ、ウィルタ（オロッコ）、ニブフ（ギリヤーク）については、樺太記念館も含めて展示されているが、こうした人々が宗谷や樺太でどのように暮らしてきたのか。展示を見学する以外で、その形跡をたどる手段は、十分見出し得ていない。また、宗谷地域で集落を形成したという樺太アイヌの人々の戦後についても、この地域を歩くだけで十分理解を得るのは難しい³²⁾。小熊英二は、アイヌの同化政策について、日本人への「包摂」と日本人からの「排除」という両義的な側面から進められていったと指摘している³³⁾。こうした矛盾は北海道でも樺太でも現れていたと考えられるが、その点を宗谷地域でどのように受け止めていくべきか。現状をさらに検証し、打開策を検討する必要があるだろう。

※本研究は J S P S 科学研究費補助金（科研費）18K12000の助成を受けたものである。

註

- 1) 「北海道150年事業」北海道総合政策部総務課<<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sum/sho/>>（2021年9月29日確認）
- 2) 「宗谷の概要」（北海道宗谷総合振興局のホームページ）<<https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/gaiyo/>>（2021年9月29日確認）
- 3) 稚内の楽しみ方 WOW! 50<<https://wakkanai-wow50.com>>（2021年9月29日確認）
- 4) 「宗谷を巡る」（宗谷総合振興局産業振興部商工労働観光課）<<https://www.souya.pref.hokkaido.lg.jp/ss/srk/kanko/model.html>>（2021年9月29日確認）
- 5) 稚内市観光振興ビジョン<<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/seisaku/keikaku/vision.html>>（2021年9月29日確認）
- 6) 稚内市観光動画<<https://www.youtube.com/channel/UCOUI84Yf2vxdmF6gTa2NCOW>>（2021年9月29日確認）
- 7) 「大韓航空機撃墜37年 稚内で慰霊の式典」（朝日新聞デジタル）<<https://digital.asahi.com/articles/ASN9271SBN92IPE00J.html?pn=4>>（2021年9月29日確認）
- 8) 「旧陸軍砲台指揮所」<<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/kyoiku/supotsushogaigakushu/bunkarekishi/bunkakenzo24.html>>（2021年9月30日確認）

- 9) 稚内市歴史・まち研究会<<https://rekishi-machi.hatenablog.com/>> (2021年9月29日確認) 富田伸司・内山真澄「稚内赤れんが通信所に関わる活動について ―稚内市歴史・まち研究会の活動について」、前掲書、71-75頁。
- 10) 斉藤譲一「稚内における大湊警備府関連施設について」宗谷防人物語実行委員会、前掲書、57-68頁。
- 11) 福留範昭・亘 明志「戦後補償問題における運動と記憶(3)強制動員被害者の遺骨返還」長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所研究紀要 6(1) 2008年、21頁。
- 12) 大橋幸男「海上護衛をつづけた艦船と幕別送信所」宗谷防人物語実行委員会『宗谷防人物語 報告書I 中世～近現代の宗谷・稚内』(2015年)、54頁。
- 13) 津軽藩兵詰合の記念碑(稚内観光情報) <<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/kanko/midokoro/spot/tsugarukinenhi.html>> (2021年9月29日確認)
成田専蔵・山田百次・河村竜也「津軽藩兵詰合記念碑と演劇『珈琲法要』」宗谷防人物語実行委員会、前掲書、79-83頁。
- 14) 「宗谷公園で稚内発祥の頃の歴史を知る。」<<https://wakkanai-wow50.com/wow50/spot/wow07/>> (2021年9月29日確認)
- 15) 井出明は真岡郵便局の電話交換手の役割について、戦時下において、情報通信の確保は補給や民間人の保護などの観点からも非常に重要であった点を指摘している。井出明『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』(2018年、幻冬舎新書)、55頁。
- 16) 「【戦後76年】全国樺太連盟、活動に終止符 歴史の継承願う－産経ニュース」<<https://www.sankei.com/article/20210813-BR67L3UV3NJUVJYI5VFSXHHUVY/>> (2021年9月29日確認)
- 17) 池田裕子「樺太庁の教員養成策-1939年の樺太庁師範学校創設に至るまで」稚内北星学園大学紀要7号、7-20頁、2007年
- 18) りんぞうくん(稚内市キャラクターデザイン)の使用について(稚内市) <<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/sangyo/kanko/rinzou.html>> (2021年9月29日確認)
- 19) 宗谷本線の無人駅、廃止が加速…幌延町が2駅廃止を容認 2021年3月のダイヤ改正で | レスポンス (Response.jp) <<https://response.jp/article/2020/03/30/333122.html>> (2021年9月29日確認)
- 20) 「稚内港北防波堤ドーム」(各地の北海道遺産) <https://www.hokkaidoisan.org/wakkanai_dome.html> (2021年9月29日確認)
- 21) 「北防波堤ドーム物語」(稚内観光情報) <https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/kanko/gaiyo_rekishi/bohateidomu.html> (2021年9月29日確認)
石川寿彦「北防波堤ドーム物語～北防波堤ドームを造った男～」(企画制作、稚内開発建設部稚内港湾事務所)
- 22) 「[ほっとニュース北海道] 樺太・千島戦争体験の絵 “三船遭難事件”を生き延びて」(NHK 戦争証言アーカイブス) <https://www2.nhk.or.jp/archives/shogenarchives/bangumi/movie.cgi?das_id=D0001200020_00000> (2018年8月27日放送) (2021年9月29日確認)
中尾則幸『海わたる聲』(柏艪舎 2019年)
- 23) 「樺太に関する資料について」保健福祉部福祉局地域福祉課<<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/feg/siryoukan.html>> (2021年9月29日確認)
- 24) 稚内北星学園大学樺太プロジェクトの制作した映像作品「ここで降りたがために、今がある。～昭和の大横綱大鵬の物語～」は、北海道映像コンテスト2019において、学生部門の最優秀賞を受賞している。

「北海道映像コンテスト2019」審査結果<<http://www.eolas.co.jp/hokkaido/hokueiren/info.htm>> (2021年9月29日確認)

同大学では、2016年に「私たちは、【カラフト】を知らない。」という映像作品も制作されており、樺太・サハリンのことを知らなかった大学生たちが、徐々に理解が深まっていく様子を捉えて作品化している。「私たちは、【カラフト】を知らない。」

<<https://youtu.be/2W2qr6zWDuA>> (2021年9月29日確認)。

- ²⁵⁾ 稚内市百年史編さん委員会 編『稚内百年史』(稚内市、1978年)、69-71頁。
- ²⁶⁾ 樺太アイヌが「日本居住を求め」たのかについては、「日本へ移住しない限り日本人としての権利を認めない」という布告により、移住を促したとされている。「樺太アイヌ」強制移住の悲劇 集落壊滅、危惧が現実には(朝日新聞デジタル) <<https://www.asahi.com/articles/ASN2D33HTN21IPE01B.html>> (2021年9月29日確認)
田村将人「日露戦争とサハリン先住民・樺太アイヌ」 ロシア史研究90巻(2012)、119ページ
- ²⁷⁾ 対雁に移住した樺太アイヌについては、第162回直木賞に選ばれた、川越宗一『熱源』(2019年、文藝春秋)の中で取り上げられている。
- ²⁸⁾ 「郷土の先人・先覚23《松本十郎》」(荘内日報社) <<http://www.shonai-nippo.co.jp/square/feature/exploit/exp23.html>> (2021年9月29日確認)
- ²⁹⁾ 「樺太アイヌ、知られざる強制移住の歴史 貧困と差別の中を生きた母娘の記録をたどる」(47NEWS 共同通信配信記事) <<https://nordot.app/626401660175385697?c=39546741839462401>> (2021年9月29日確認)
- ³⁰⁾ 「運転手や負担金 住民も運行に参加」北海道新聞 どうしん電子版 (2021年6月13日配信) <<https://www.hokkaido-np.co.jp/article/554934>> (2021年9月29日確認)
- ³¹⁾ 北海道における「開基」の意義について、開基百年を記念する事業が道内各地で行われる際に、その前史となるアイヌの歴史の位置づけ、北海道開拓が和人による侵略である点の位置づけなどを巡る議論について、桑原真人「北海道近代史と『開基』意識」札幌大学産研論集12号、155-159頁。
- ³²⁾ 稚内市内で発行されている新聞「稚内プレス」が、2020年4月11日、時の話題「稚内のアイヌ」として、「先住民として稚内に居たのは事実であり、手探りでも市教委には歴史の一コマとして集録してはいかがか。」という提言を行っている。このような提言が出ることで自体が、地域においてもアイヌの人々の文化の保存継承についての関心が高くないことを示しているように思われる。<<http://wakkanaipress.com/2020/04/11/44985>>
- ³³⁾ 小熊英二『<日本人>の境界』(新曜社、1998年)、50-69頁。